

を校定したもの、多い中で、これほど細密確實なもの他に無く、紙面が殆ど紅緒に(カ)埋まつて居るといふ。また武邊叢書、古事逸傳考、逸文風土記、中外經緯傳の如き輯録書、及び神名帳索引、日本靈異記索引の如き索引書の類が百五十卷に餘つて居る。

(チ) 轉寫の書が誤を傳へることを歎じては

抑余有歎、轉寫之書每一手必增誤脫、如字鏡集、色葉字類抄、誤脫極多、爲用者小間視本篇、有人轉寫者其誤妄不可勝言、夫人似猿猿似犬、犬之與人豈可比乎、轉寫之誤亦如之、

余是故欲上本此書以遺不朽、余志若不果、吾諸同志人。(新譯類聚名義抄附言)

といつて居る。

(ワ) 古史徵開題記冬の卷に引いた翁の言にも

すべて古き書は、糺紙の卷物なるが多きを、年經るまゝ、に斷れ散在るを、都へ集て寫すさて、次第を錯りたるが本一書となりて、條々の混めたるがある例にて云々。とある。

(カ) 新寫類聚名義抄附言に

今用二本對校其異者、繪墨記之、世人皆用宋、而余用緒者非好異也、施之愈煖燈下取其易認也、今本亦然)と見えて居る。

雜纂

松永貞徳の父祖について

文學博士 藤井乙男

徳川初期の歌人俳家として有名なる貞徳の名は普く世人の知る所であるが、一時は飛ぶ鳥をもおとす勢のあつた貞門の俳諧も、蕉風の勃興に及んで古風の名の下に輕蔑し去られて顧みる者なきに至つたため、通俗文藝宣傳の開祖たる此翁の事蹟も熱心なる研究者を得ずして今日に至つたのは氣の毒な次第である。今まづ其父祖について小研究を試みる事とする。

貞徳の父祖について多數の書は、久秀の孫といふに一致して居る。その基く所は貞徳の子である尺五堂恭儉先生行狀尺五先生全集にあるらしい。今其行狀中必要なる部分を摘むと、同年(天正四年)九月二十七日、信長公命長男信忠、帥數萬騎攻信貴城、使佐久間信盛先登拔此城、久秀公入天守、欲使二男宗通宗勝出城、二男相俱請同死、………而久秀放火於天守、父子三人同自殺死矣、永種居士者久秀公季子而于時三歲也、久秀公之姨矜其孤弱、命乳母懃負之竊出城、躬親撫養、而後隱惠日山東福壽寺、爲雍染之身隱浮圖、祖母歸心於蓮宗、陰招致之、去東福禪院、寓泉州堺之法華寺、後遷洛之本國寺、偶讀孟子、及不孝者無後爲大之語流涕、忽然而脫縊服代素衣永欲保子孫、是先生之祖父也、昔在惠日山、聞法華經楞嚴經維摩經圓覺碧巖禪錄及四書六經之講解、而儒釋兼學也、能書以入木道鳴世、依之都鄙學書書生、以金銀米錢代筆跡而

學之、勝師者多矣。中葉在連歌之宗匠宗養門下、學歌藝詠和歌爲連歌、以風雅爲一生之遊樂、與紹巴同門也、在洛永種生貞徳(下略)とある。永種が貞徳の父たるは疑もなき事實なれども、永種が志貴城から脱れ出た久秀の子であるといふ記事には疑を免れない。貞徳の誕生は元龜二年で、志貴落城はそれより後るゝこと五年の天正四年である。此行狀の記事に據れば子が父に先だちて生れた事になる。又貞徳の自傳ともいふべき戴恩記下卷五十三丁に天正元年に信長が兵を率ゐて將軍義昭を二條城に攻めた時、洛中混雜の有様を述べて、其亂に下京の残りしは、年寄ども寄合公方衆にかくし、信長公へ御禮申べきとあれば尤然るべし、さらばなにをか奉るべきといふ處に、折節十四屋隆正が許に鶴あり、是目出度ものなれば、着に定め御樽用意す、又軍の爲にもなるべしとて、俄に赤飯をむし、柴田修理亮殿を頼み、知

恩院へ町を進上したりしかば、御機嫌よくおはして、路次すがらの土民百姓等に急ぎ罷上り、亂入せよと言付しかば、定而やがて來るべし、隨分はごられぬやうに防べし、猶是よりも下京は用捨せよと仰らるべきよし御誼ありしゆへ、上京公方を最負して亂入を妨手立作りし事を、ふかくにくみ給ひ、關より東の數萬の物取ども、さしつかはされければ、或ははぎ取、土藏を打やぶり、或はうちころしふみころし、或は方々に放火せしほごに、一家も残らず焼のぼる、焔天にかゝやき煙のそこに泣おめくころゑ、叫喚大叫喚の地獄にことならず、下京は亂妨せざれども、財寶を邊土へのけ、或は東山、八幡、桂、嵯峨、愛宕などへ縁にしたがひて、足よはごも落しつかはすこて、走りまごふ、子をさかさまにおひぬる丸が父母も子どもを引具し、北山の畑といふ所へ落けるが、路次の難艱中々いふにた

らず、中にも迷惑せしは、ある山川の岩波たざりて、かち渡りおもひもよらざるに、たゞほそきひとつばし有りけるを、おさなき子は右の手にてかゝへ、丸があねの六つばかりになりしを、左の手にてひき、よこさまにそろ／＼と渡られしを、こなたのきしより、それも子供を前うしろにいただき、見やりたれば、橋の半にて父が顔の色、下の水よりもあをくみわしと、後に母の物語有しを、いま思ひ出すに、父母の心のうち思ひやられてかなしくこそ侍れ。

ごある。是で見ると永種は志貴落城前より下京に住居して、貞徳の外に長女まであつた事がわかる。永種が幼少の時志貴城から脱出したもので無い事は是等で明かであるが、久秀の子であるか無いか尙疑問として殘る。誹諧家譚貞徳の條に、父永種、(攝州高槻刺史入江九郎盛重之男五郎政重之長子、後改レ氏稱「松永」(原註)母播州宇野氏女とある。

永種を久秀の子といふ明証のない以上は、此説の方が正しいのではあるまいか。松永家の由緒書には政重の姉を久秀の後妻とし、貞徳終焉記には永種を久秀の甥として居る。誹諧京羽二重には「入江盛重の室は松永霜臺の伯母也、此腹に五郎政重を産めり」とある。

松永家と入江家との姻戚關係から永種が松永氏を名乗りしたため、世間では久秀の遺子と言ひ囃したのではなからうか。尺五先生行狀文の母堂者駿州之太守入江氏、數傳至五代之祖攝州刺史盛重、盛重生政盛、政盛將死遺言、謂後嗣繼武業、則必當改松永以母黨入江爲氏、若不繼武業則以松永爲氏、是織田信長以爲暴勇奸悍強敵、忌誅於松永千族種類、變姓名改入江、其後信長公於洛本能寺、爲明智惟任遭弑、而後改入江爲松永とある。一体行狀の文は極めて拙陋で辭意明瞭ならざる点が多いが、兎に角松永氏を稱するに至つたのは、信長死去の

後である事は然るべきであらう。家譜に貞徳の母を播州宇野氏といふは藤原惺窩の一族でもあらうか、行狀に「永種者藤體胖惺窩先生之姪」である。姪をメヒムコの意とすれば是も疑はしい、貞徳の生れた年に惺窩は十一歳であるから、姪なる人の年齢が相應せぬやうである。貞徳永代記に「冷泉妙壽院の妹姪」とあるは愈々疑はしい。戴恩記には「丸が父は冷泉爲純公とは從昆弟なれば、定家卿を其鬼にあらずとも思ひ難し」と見て居る、爲純は惺窩の父である。又行狀には貞徳の妻を爲純の女とし、誹諧京羽二重には永種の母を下冷泉爲氏？の女としてある。此の如く諸説區々であるが、冷泉家と姻親の間柄であつた事だけは慥かなやうである。永種は寶幢坊德庵と號す、その和歌連歌に名あつた事は所引の行狀の文に見ゆる通であるが、戴恩記にも「安休法師は亡父が門弟なり、連歌の古實を丸に少し傳られし人なり、

丸が父は七歳にして、東福寺の喝食となり、廿日に法華經一部よみおぼわしほどの智慧なれば、文珠喝食と世に申せし人なるにより、多能なりきとある。野史は貞徳の傳記中に戴恩記を参照しながら、久秀の傳中には永種が志貴落城の際殉死したと書いてあるのは杜撰も亦甚しい。

龜茲・于闐の研究

文學士 羽田 亨

印度歐羅巴語に屬するトカラ語、東イラン語などいふ死語が、東トルキスタンから發見せられて學界を驚かしたとは、既に十數年の昔になつたが、此等の言語が何れの地に行はれ、また何れの時代に用いられたものであるか、尙また此等の言語はこれが行はれた時代及び地方に於ける日用語であつたか、それとも一種の政治語とでもいふべきも

の、假令ばその地の征服者の間に於ける通用語で、土語は別に存したものではなかつたかといふやうな問題は、比較的永く論定されなかつたのであるが、一九一三年にコレージュ・ド・フランスの教授 Sylvain Lévi 氏が先づお種のトカラ語について此等の問題を論じ、ついで翌一九一四年には諾威クリスチャニヤの大學教授 Steen Knower 氏が東イラン語について同様の研究を公けにした。此の兩個の研究は一は今の庫車の附近から發見された文書を資料とし、二は和闐附近から出た文書を資料としたものであるが、その研究の仕方は殆んど全く同一であつて、文書中に見ゆる國王の名を支那の記録に求めて文書作成の時代を明らかにし、文書の用語がそれ／＼龜茲・于闐の國語であつたを論じ、且此等の言語は西紀一世紀前後から唐代迄引き續いて兩國の日用語であつたとを論定したものである。言語は民族の標幟ではないにしても、